

# 〈話存在〉的実践としてのソーラー

—ラカン派精神分析理論における「サントーム-脚立」のアマルガムについて—

## 要旨

氏名：北村公人

本稿の目的は、ラカン派精神分析理論における「脚立 *escabeau*」という術語の曖昧さを明確にし、その上で脚立理論が精神分析にもたらす寄与を考察することである。精神分析は、分析主体の特異性を認め、個人がその特異性と共に自己の生を貫徹することの支援を第一としている。そのため、精神分析の臨床では分析主体の個別の生の価値観を探求していくが、その探究の営みを分析家と分析主体の間に留めていては、その外部の人々と繋がることはできない。すなわち、精神分析において課題とされてきたのは、個人の特異性を、いかにして普遍性へとつなげるか、その方法論を導き出すことであった。「脚立」という術語は、特異的な〈一者〉の享楽を基にして、分析主体が他者と繋がる機能を担うものとして、近年のラカン派で注目されてはいるものの、その実践としていかなる活動が行えるのかという点についてはいまだ明確な議論がない。そこで本稿は、ラカン＝ミレールの言説に検討を加えることで脚立の真髄を描き出し、さらには、いかにして個人の特異的な〈一者〉の享楽を普遍性へとつなげることができるのか、その具体的な方法論を提示することを目指す。

そのために、第一章でラカン＝ミレールのテキストを検討することで、脚立理論がどのように展開し、脚立とは何を指すのかを、レヴィ＝ストロースの砂時計型形象論の読解も交えながら概観する。第二章では、脚立の古いパラダイムとして考えられているフロイトの昇華理論を、先行研究を参照しながら紐解いた上で、昇華の結果として現れる現象と脚立の結果として現れる現象の性質が、それぞれ異なることを明らかにしていく。第三章では、脚立の結果として現れる美を「〈一者〉の可思議 *la - heimlich*」と呼称し、その美をフロイトの〈不気味なもの〉と比較した上で議論していく。第四章は、脚立に基づく現代的な実践の可能性を提示するセクションであり、本稿ではその実践を「ソーラーになること」と規定し、そのような脚立理論を用いた実践へと、本稿の読者がいかにして向かうことができるかを示す。本論文を締めくくる「結」では、これまでの議論を総括し、脚立理論の限界点を確認した後、その上で改めて概念としての意義を明らかにする。